

# 「全国高校生読書体験記コンクール」中央入賞者（敬称略）

<p><b>【文部科学大臣賞】</b> 茨城県立水戸第一高等学校 一年 <b>池田 渉</b> <b>蚊と変身</b></p> <p>（体験書籍『変身』 フランツ・カフカ 池内 紀 訳 白水社）</p>	<p><b>【全国高等学校長協会賞】</b> 宮城県仙台二華高等学校 一年 <b>井崎英里</b> <b>『遠野物語』の世界を旅して</b></p> <p>（体験書籍『口語訳 遠野物語』 柳田国男 後藤総一郎 監修 佐藤誠輔 口語訳 河出書房新社）</p>	<p><b>【全国高等学校長協会賞】</b> 東京都 恵泉女子学園高等学校 二年 <b>津田 脙</b> <b>「言葉の森」を彷徨う</b></p> <p>（体験書籍『あたらしい図鑑』 長蘭安浩 ゴブリン書房）</p>
<p><b>【二ツ橋文芸教育振興会賞】</b> 千葉県立東葛飾高等学校 二年 <b>谷 茉里</b> <b>生と死を認識するもの</b></p> <p>（体験書籍『100万回生きたねこ』 佐野洋子 作・絵 講談社）</p>	<p><b>【二ツ橋文芸教育振興会賞】</b> 兵庫県立加古川東高等学校 二年 <b>木船 幸太</b> <b>読書が与えてくれたこと</b></p> <p>（体験書籍『カブトムシ山に帰る』 山口進 汐文社 『屋久島発 うみがめのなみだ その生態と環境』 大牟田一美・熊澤英俊 海洋工学研究所 出版部 『コウノトリがおしゃてくれた』 池田啓 フレーベル館）</p>	<p><b>【二ツ橋文芸教育振興会賞】</b> 奈良県立畝傍高等学校 二年 <b>中尾茉結奈</b> <b>「おもい」をのせる便せん</b></p> <p>（体験書籍『ツバキ文具店』 小川糸 幻冬舎）</p>
<p><b>【二ツ橋文芸教育振興会賞】</b> 和歌山県 <b>清水愛萌</b> <b>音楽は神様からの贈り物</b></p> <p>（体験書籍『棒を振る人生 指揮者は時間を彫刻する』 佐渡裕 P.H.P研究所）</p>	<p><b>【二ツ橋文芸教育振興会賞】</b> 愛媛県立松山東高等学校 三年 <b>沖田 英里</b> <b>生のかたち</b></p> <p>（体験書籍『芽むしり仔撃ち』 大江健三郎 新潮社）</p>	<p>18</p>
16	14	8
		4

# 「全国高校生読書体験記コンクール」について

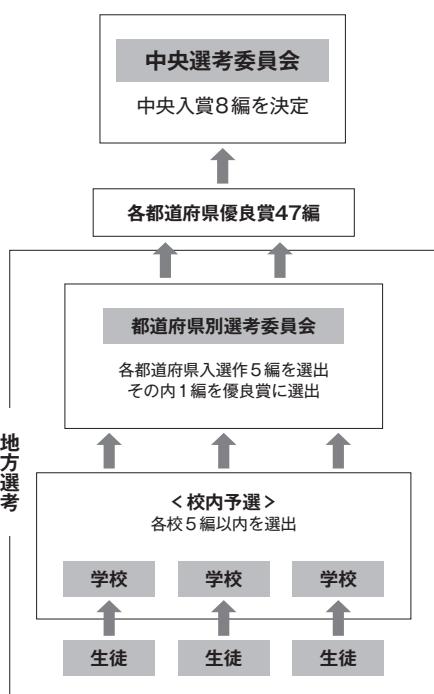
このコンクールは、公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会が、文部科学省、全国都道府県教育長協議会、全国高等学校長協会、各地の新聞社、集英社などのご後援をいただき、「高校生のための文化講演会」とともに毎年実施している事業で、多くの高校生ができるだけたくさんの本と出会うきっかけをつくることを目的としています。「感想文」を綴るだけにとどまらず、読書によって自分が何に気づき、どのように行動したかをふりかえることが大切であると考え、「読書体験記」といたしました。

第39回の本年度は、全国47都道府県から449校の参加があり、応募作品は92,591編となりました。

## 【選考】

- ◎生徒から提出された応募作品は、各学校の校内予選により5編以内が選ばれ、都道府県別の応募先に提出されました。
- ◎その後、都道府県別選考委員会において、「都道府県入選」5編が選ばれ、その中で「優良賞」とされた1編が中央選考委員会に送られました。
- ◎各都道府県で選ばれた「優良賞」合計47編の中から、中央選考委員会において、文部科学大臣賞・全国高等学校長協会賞・一ツ橋文芸教育振興会賞の「中央入賞」作品8編が決定しました。

## 【作品の応募と選考の流れ】



## 【賞】

### 中央入賞 8名

・文部科学大臣賞 1名 賞状・楯・記念品

・全国高等学校長協会賞 2名 賞状・楯・記念品

・一ツ橋文芸教育振興会賞 5名 賞状・楯・記念品

\*中央入賞者8名と付添い教師(各1名)を東京へ招待し、表彰します。

\*中央入賞者在学の8校には「学校賞」として、楯および

「集英社文庫100冊セット」を贈呈します。

### 優良賞 39名 賞状・記念品

\*優良賞受賞者在学の39校には「学校賞」として「集英社文庫

50冊セット」を贈呈します。

### 入選 187名 賞状・記念品

\*入選者在学校には「学校賞」として「集英社国語辞典」を贈呈します。

## 【中央入賞者表彰式】

2020年1月27日(月) 東京・水道橋 東京ドームホテル

## 【中央選考委員(敬称略)】

辻原 登(作家)

穂村 弘(歌人)

角田光代(作家)

長尾篤志(文部科学省初等中等教育局主任視学官)

小林正人(全国高等学校長協会)

## 【主催】

公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会

## 【後援】

文部科学省・全国都道府県教育長協議会・全国高等学校長協会・集英社

北海道新聞社・東奥日報社・岩手日報社・河北新報社・

秋田魁新報社・山形新聞社・福島民報社・上毛新聞社・

産経新聞社・神奈川新聞社・山梨日日新聞社・信濃毎

日新聞社・新潟日報社・北日本新聞社・北國新聞社・

福井新聞社・岐阜新聞社・静岡新聞社・中日新聞社・

京都新聞・神戸新聞社・山陰中央新報社・山陽新聞社・

中国新聞社・徳島新聞社・四国新聞社・愛媛新聞社・

高知新聞社・西日本新聞社・佐賀新聞社・長崎新聞社・

熊本日日新聞社・大分合同新聞社・宮崎日日新聞社・

南日本新聞社・琉球新報社

## 【地方主催】

北海道高等学校文化連盟図書専門部・青森県高等学校文化連盟文芸部・岩手県高等学校文化連盟文芸専門部

## 【文部科学大臣賞】

# 蚊と変身

茨城県立水戸第一高等学校 一年

池田 渉

『変身』を読み終えて本を閉じた僕は、なんだか朶然としない気持ちを整理しようと、ほとんど寝そべるような格好でソファに座つた。考える意志はあるのだが、どうにも頭がはたらかなくて思考がいつたりきたりを繰り返していた。そのとき蚊が右腕のあたりにとまっていることに気が付いた。

手で払つても蚊は僕の周りを不快な音を立てながらとび、今度は左腕にとまつてきただ。全然考えがはからていなかつたのも相まって少し苛ついてきたので、蚊が僕の腕を刺して血を吸い始めるのを待つて、右手を蚊にめがけておもいつきり叩きつけた。叩いたところが赤みをおびてひりひりしたが、蚊は無事に殺せたようだつた。僕は僕から吸つたであろう血をとびちらせてピクピク動いている蚊をティッシュにくるんでも捨てた。

またどつぶりとソファに腰かけるが、なぜかさつきの蚊のことが頭について離れないと、死んでなおつきまとう蚊のしつこさにも違つてくるのだろう。

その疑問を解消するために『変身』をもう一度読み直してみた。そして気付いた。蚊の最後がただの虫の死にすぎなかつたのに対し、グレーゴルの最期は実に人間的

だつた。グレーゴルの家族の彼の扱い方が日毎に人間のそれとはかけ離れていつて、彼が死んだ晩には「もう縁切りにしなくちや」ならない「へんな生き物」という存在にまで成り果てたというのに、グレーゴルが彼の部屋に戻つてから死を迎えるまでの彼の姿は、来るべき最期をやすらかな気持ちで待つ、衰えきつた哀れな人間そのものだつた。

しかし考えてみればそれは当然のことだ。グレーゴルの姿形は虫になつたとしても彼の内面までは変身しなかつたのだから。彼はただ足が無数に生えていて、甲羅のよう固い背中をもつてゐるだけの人間なのだ。彼を虫たらしめていたのは彼の外見ではなく、彼を虫として扱う周囲の人間だつたのではないだろうか。

ようやくこの作品の輪郭がつかめてきた気がする。つまり、カフカがこの作品を通して伝えたかったのは、自分という存在は他人との関わりの中でかたちづくられるものだということではなかろうか。僕もある日の下校中に、人格というものはスライムみたいだなど考えたことがある。単体ならばどんな形にもなれるが、たくさんのスラ

イムを箱の中にぎゅうぎゅうにつめると一つ一つのスライムの形を操作することは困難になる。そしてしばらくするとすっかり固まつてしまつて以前のような柔軟性を失つてしまう。グレーゴルはすでに人格が固定していたのに、彼の外見が虫になつたことによる衝撃で周りのスライムが形をかえ、虫の枠にねじこめられたから困惑し懊惱したのだと思う。僕が思うに変身とはグレーゴルの姿が虫になつたことではなく、彼をとりまく環境が虫用のものになつたことをさすのではないだろうか。

そう考へると引越や進学などによる環境の変化も、大きな意味でとらえれば変身なのだから変身は万人に起ることだと言える。そしてその変身に上手く順応できないと不登校になつたりうつになつたり、あるいは自ら死を選んでしまつたりする。グレーゴルがそうしたように。

人が虫になるという突拍子もない出来事の延長線上に日常であたりまえに起こることがあり、現代にもグレーゴルと同じような苦しみを抱えている人が大勢いる。そんな普遍性がこの作品を名作たらしめているのかもしれない。

気がつけば時刻は12時を回つていて、『変身』を読み始めたときにはまだほんのり明るかつた空も暗闇にとけて星が点々と輝いていた。シャワーを鳥の行水ですませ、歯も雑にみがくとうすいかけ布団とベッドの間に体をすべりこませた。グレーゴルが虫に変身した前の晩ももしかしたらこんな感じだったのかもしれないな、なんてことを考へて目を閉じた。高校生活にも慣れてきて、四月九日に起つた変身にも上手く順応できたようだつた。これからもいろいろな変身をしなくてはならないだろうが、虫にだけは御免だと思つた。そうして、いつのまにか眠りについていた。

翌朝、池田涉が不安な夢から目を覚ましたところ、ベッドのなかで、自分が途方もない虫に変わつてゐるのに気がついた。

そんなことはなかつた。

体験書籍

『変身』 フランツ・カフカ 池内 紀 訳

白水社

## 【全国高等学校長協会賞】

# 『遠野物語』の世界を旅して

宮城県仙台二華高等学校 一年

井崎英里

まだ冬の寒さが残る三月早朝。仙台駅を出発した電車は北へと進路をとった。小牛田、一ノ関、花巻と乗り換えた私は、かつて柳田国男も訪ねた岩手県遠野市を目指している。乗客が減ると同時に車両も減り、

花巻駅から先の電車は、とうとう一両編成となっていた。小さなマッチ箱のような電車は私達家族の貸し切りだ。線路が一車両分しかないこともあります。車窓から見える景色がとても近く感じられる。手を伸ばせば枝に届きそうな木々のトンネルを抜け、宮沢賢治が物語の世界で描いた「めがね橋」

を越える頃には、もう私の知る街並みはなくなり、見渡す限りが山と田畠の世界へと変わっていた。ここが私の目指す『遠野物語』の世界への入口である。私は再び、その扉の前へとやつて来たのだ。

農作業をしていたおばさんが腰を上げ、私の乗る電車に手を振ってくれた。私も手を振り返しながら、高鳴る胸を抑えた。堪え切れないほどに高まる気持ちが、心から飛び出し先走る。かつての柳田もこんな気持ちだったのだろうか。流れる景色一つ一つが物語の世界と重なる。

冬の遠野を訪ねたいと思い、今回は三月を選んだ。昨年の夏に続く二度目の訪問である。この時期雪がないのは珍しい、と遠野の方々は話していたが、やはり寒いだけの仙台の冬とは何かが違う。山が、木が、土が、水が、全てが冬に染まり、囲炉裏の暖かさは優しく、心の奥にまでその温もりを届けてくれた。

岩手県遠野市。ここで生まれた話が、『遠野物語』と名付けられ、世界へと広まつた。それを広めた人が、柳田国男である。今は柳田と同じルートで遠野を目指した。

柳田は一九〇九年夏に初めて遠野を訪ねている。丁度お盆の時期で、新盆の家では、紅白の旗を高く掲げ、死者の魂を招いていたと言う。私が初めて訪ねた日も送り盆だった。風に揺れる紅白の旗は、「灯籠竿」と呼ばれ、白が男性、赤が女性を意味し、旗の長さも亡くなつた年が一番長く、その後長さを短くしながら三年間続けられると聞いた。そして夜には商店街全ての店先で、送り火が焚かれた。初めて見る伝統行事に、私は目を奪われた。遠野に残されたこのようない信仰や文化を、柳田はどうのように捉えたのだろうか。

遠野に残された話とは、「昔々あるところに……」で始まる昔話とは違い、時も場所も、登場人物も大方はつきりしている。世間話や噂話も数多く、話に登場する場所が実際に遠野の町に存在し、訪ねることができる。昔話ではなく取材記事なのだ。

柳田はこれらの話を遠野出身の佐々木喜善より聞き、書き出したものが、私も読んだ『遠野物語』だ。遠野の町を歩いているとよく、佐々木の話を見聞きする。佐々木とは、地元の誇りであり、遠野が生んだ偉人なのだろう。私が紹介された遠野の語り

部である大平悦子さんは、小学三年の担任が、佐々木の三男、佐々木光宏だったと話していた。息子へと伝えられた佐々木の言葉が、大平さんを通し、時を超えて今私に向かつて届けられること。それが真の民話の魅力なのだと思う。

私は二回の訪問で、『遠野物語』に登場する数々の名所を訪ねた。『遠野物語』は、

一つ一つの話が短い。物語に登場する場所を前にすると、そこに存在する不思議な世界、見えない何かをふと感じる瞬間がある。そして私の知る物語に、色や匂い、温度が加わる。デンデラ野を駆け抜ける風。卯子酉様に所狭しと結ばれた赤い布。鎮座されるオシラサマの裏の部屋から、幼い子どもも、登場人物も大方はつきりしている。世間話や噂話も数多く、話に登場する場所が実際に遠野の町に存在し、訪ねることができる。昔話ではなく取材記事なのだ。

この夏私は姉と共に、地元仙台市を流れる広瀬川に残された伝説の数々を調査している。三原良吉氏を初めとする多くの先人

の方々の本を参照する一方で、直接現地へ出向き、残された石碑の文字や、祭事、古くから地元に住む人々の話を聞く活動を行った。仙台にも遠野のような世界が確かに存在していたのだ。遠野への旅で、私はその鍵を発見したのかもしれない。それは『遠野物語』や広瀬川伝説だけではない。

全国各地にある数々の伝説や物語は、昔から今は続く人々の、長い暮らしの中から生まれ、育ち、名前も知れない無数の語り手によって語り継がれてきたものである。語り継がれてゆくうちに、面白可笑しく膨れ上がり、その中に人々の願いや夢、不平や不満でもが上手に育まれたのだろう。

仙台へ帰る電車の中、私は名も知れぬ語り手たちに思いを馳せた。時間という空間を超え、彼らによつて紡がれた多くの神々や精霊の話が、小さな一冊の本となつてひしめき合っている。この物語を今度は私が、名も無き語り手の一人として後世に残したいと思う。

体験書籍

『口語訳 遠野物語』 柳田国男

後藤総一郎 監修 佐藤誠輔 口語訳

河出書房新社

# 【全国高等学校長協会賞】 「言葉の森」を彷徨う

東京都 恵泉女子学園高等学校 二年

津田 朔

今、世の中は言葉で表現することを常に求められていると思う。SNSでは世界中の言葉で情報が飛びかっている。大学受験では記述式の試験が導入される。また、学校では課外授業のたびに感想を書くことを求められる。私はずっと、こういった様々な場面で言葉を使って表現することが得意ではなかった。特に、言葉にするまでの速度を求められることは苦手だった。学校で、時間内に感想を書かなければいけない時はきまつて用紙が半分埋まるかどうかであり、

国語のテストで記述問題を見れば後回しにしたくなる。自分の言葉を使ってまとめた文章を書くことをできるだけ避けたいと思いつけてきた。書いている時、常につきまとう「何か気持ち悪い」という違和感がいつも私の筆をとめてしまつた。自分が思つていることと自分から出た言葉がちぐはぐだという感じは拭いきれず、そう感じることが嫌いだつた。

例えば、平和学習で広島を訪れた時のことだ。私は初めて原爆ドームを見た。ガイ

ドの方の説明を聞きながら見て回つている間、私はただただ原爆ドームを見上げていた。原爆ドームは教科書の写真から想像していたより遥かに大きかった。見学後、周囲では友達が感想を言い合つてたが私はその輪の中に入らなかつた。その時はまだ、自分が感じたことを言葉にできていなかつたからだ。確かに「何か」は感じた。様々な感情を表す言葉がよぎつたが、どれもしつくりはこなかつた。感じた「何か」はまともらず、いつこうに言葉にできないまま、

その日の夜になつた。夜にはその日一日の感想を書く時間がもたれていた。先生にせかされながらどうにか紙の三分の二を埋めた私の感想は、後から読み返すとすごく陳腐なものだつた。書かれていることはただ綺麗にまとめられているだけで、私の内面とは一ミリも合っていないと感じ、その気持ち悪さに吐きそうになつた。言葉になつていい感情を無理やり言葉にすることが本当に辛く、綺麗にまとめられただけに思える自分の文章も心底、嫌だと思つた。自分の文章が面白くなくてとても悔しかつた。

『あたらしい図鑑』の中で、少年は老詩人の「詩になる前のもやもや」をまとめたスクラップブックに出会う。「あたらしい図鑑」と命名されていたそれには、小枝の上で干からびたカエルや、猫のヒゲ、インスタント写真などが貼つてあつた。老詩人は少年にも「言葉にならない感情」を集めようと言う。何でもいいから自分が気になつたものを紙に貼つてそれを見続けている。その言葉たちが自分に一番近いものだと老詩人は言う。そして、自分の「あたらしい図鑑」をつくり始めた少年に老詩人はこう

言葉をかける。「少年も、ついに言葉の森に足を踏みいれたか」と。

今、私は少年と同じように言葉の森を彷徨つてゐるのだと思う。私が覚える違和感も、自分の文章の気持ち悪さも、言葉に真摯に向き合い始めた証なのだろう。この世には「言葉にならない感情」があり、それを見つけるには向き合い続ける時間がいる。私は原爆ドームを見た後に、自分の想像の域より大きかつたものに向き合つた時間が圧倒的に足りなかつた。だからこそ、書いた感想が陳腐なものに感じられたのだと思う。老詩人は少年のつくりかけのスクラップブックを見て、「面白かったぜ」と言つた。それは、そのスクラップブックにはまだ少年に一番近い言葉がなくとも、少年の正直な思いが溢れていらからだろう。もし私が感想を書いている時、その時点で一番自分に近い言葉を探して使つていたら、それはど気持ち悪いとは感じなかつたかもしれない。むしろ「面白い」ものになつていて、自然と湧き上がつてくる言葉がある。

物語が終わりに向かうにつれて老詩人は

死へと向かっていく。病床で、老詩人はそれまで「少年」としか呼んでいなかつた少年のことを初めて「五十嵐くん」と名前で呼ぶ。老詩人は少年を、「五十嵐」という、少年を一番に表す言葉で呼ぶことを認めたのだ。それは、老詩人が少年と共に言葉と向き合う一人の「人」とと考えていて、表している瞬間だつた。言葉と向き合い続ければ、自分に一番近い言葉が分かる。まだ、その言葉が見つかっていない時でも、その時点での自分の言葉を正直に書けば文章は面白くなる。たとえ、自分の正直な言葉が他人に評価されなくても、自負できるものであれば良い。すごく当たり前ですがく難いことだ。誰だつて言葉を必死に探すことはきつく、聞こえの良い言葉を並べたくなる。しかし少しでもそれに気持ち悪さを感じるのであれば、その人は言葉の森に旅に出なければならない。そうすれば、同じように旅をしている人が見つけて認めてくれる。私はそう、この本から学んだ。私はこれからも言葉の森の旅人であり続けよう。

『あたらしい図鑑』 長薗安浩 ゴブリン書房  
体験書籍

## 【二ツ橋芸文教育振興会賞】

# 生と死を認識するもの

千葉県立東葛飾高等学校 二年

谷 栗里

「これとこれと、あとこれも読んで……」

何気なく家の本棚を眺め、いつの間に減ったのか数えるほどになつた絵本の表紙を目で追つていると、懐かしい声が頭に響いた。まだ五、六歳の小さな私の声。その頃家の本棚にはたくさんの絵本があり、私は毎晩母親にお願いして読み聞かせをしてもらつたものだった。

『100万回生きたねこ』その文字を見た時、流れていた目が止まつた。読んでもらおうとした記憶がほとんどない。それがな

ぜなのか、今なら分かる。私はただ嫌だつたのだ。ねこが死ぬということが。母が、優しい声で「ねこはもう、けつして生きかれりませんでした」と言うことが。死の余韻を残して眠るということが、何よりも恐ろしかつた。

生きているものはいつか死ぬ。そんな当たり前の現実を、初めて正面から受け止めたのはその頃だつたと思う。天国や地獄はアメリカのように行き来ができる場所だと信じていた無邪気な私は、周囲の大人の短い

否定で「死」というものを認識するようになる。それは足のつかないブールのように私を焦りと恐怖に沈め、私はけなげにも老いて死んでいく母親の姿を想像しては泣いていた。私が何よりも恐れていたのは、確かに母の死だつた。

手に取つて再読すると、この本に対する印象が一変した。主人公は百万回生死を繰り返すねこ。飼い主はねこの死の度に泣くが、当のねこは一度も泣かず、死を恐れることもない。昔はそれを意地悪だと感じた

ものだが、出てくる人間を見るとどうだろう。人間たちはねこを連れまわし都合よく使つているような印象を受けた。初めの文に「100万人の人が、そのねこをかわいがり」とある。辞書で「かわいがる」と調べると、「かわいいと思つて大切に扱う」とある。つまり「ねこ」という人間から見て弱い存在に対し、上から下へ注ぐ一方通行の行為である。その後主人公はのらねこになり、周りのめすねこから様々な奉仕を受ける。これも「りっぱなのらねこ」に対して下から上へ送る、一方通行の行為である。「しぬのなんかへいき」「だれよりも自分がすき」というねこの言葉は、これらの行為に対する皮肉のようで胸に刺さる。他者からの愛の中で生きるねこを見て、ある言葉を思い出した。三浦しをんさんの小説『まほろ駅前多田便利軒』の中で、ある母親は「愛情というのは与えるものではなく、愛したいと感じる気持ちを、相手からもらうこと」と言う。この言葉に沿えば、愛することは受動態の文、英語だと主語とbe動詞プラス動詞の過去分詞、byから始まる副詞句で表せる。そしてねこはいつも副詞句の中にいる。

最後に主人公は白いねこと出会い、いつしか寄り添うようになる。ねこが初めて愛するという受動態の主語になつた瞬間である。しかし、生きているものはいつか死ぬ。白いねこも。その時ねこは初めて泣くのだ。人間がねこに涙を流した数、百万回を、たつた一匹の白いねこに向けて。やがてねこも静かに息絶え、二度と生き返らない。

「ねこはいつまでも幸せに暮らしました」私が望んでいた結末はこれだ。なぜねこは百万回も生きたのか。それなのになぜ最後にねこは生き返らなかつたのか、考えた。うねる思考の先で、あの時の小さな私が泣いていた。私は問いかける。「なぜ泣いているの?」「お母さんが死んじやうから」。私は重ねる。「死ぬって何?」小さな私は答えられない。当然だ。今の私が分からないのだから。とても複雑で、理解不能で、それでいて単純なような不可思議さをもつもの、それが死だ。どんな天才でも理解でききないだろう。だが身近な死の体験すらも無い小さな私は、しつかりと死というものを飲み込んでいた。大好きな母が居なくなつたものに確かな輪郭を与えていた。生と

死は、私たちが他者への愛情というファイルを通して通した時に初めて認識されるのかもしれない。そして愛するという行為こそが生を有意味化するのかもしれない。だからねこは百万回も生き、最後は生き返らなかつたのかなと思う。

居間で寝ている母を見る。あの頃より白髪も皺も増えたし、小さかつた私はもうすぐ選挙権を持つ。私たちは時々刻々と確實に死に近づいていて、でもそれでいいと思えた。かつて絵本があつた場所には、家族のアルバムがたくさん並べてある。世界には愛するという受動態の文が、主語と副詞句を変えて無限に存在しているだろう。それは二者間を相互に伸びる矢印であつてほしい。人もまたこのねこのように、副詞句ではなく主語にいるときに生きる意味を見出し、幸せを感じができるのなら、私は誰かの副詞句でありたい。何かを与える存在になりたい。世界を網のように交差する幸福なこの文の主語の内側から、自分の生をしつかりと見つめながら。

体験書籍

『100万回生きたねこ』 佐野洋子 作・絵

講談社

## 【二ツ橋文芸教育振興会賞】

# 読書が与えてくれた、こと

兵庫県立加古川東高等学校 二年

木舎幸太

うに小型化し始めたことを知つて驚いた。

「ウミガメ」は父が、

「屋久島へ行こう」

と言い出した時に『どんな島だろう』と

思いインターネットで本を探したら…。旅行を楽しみにしている僕の目に留まった書名は、『屋久島発うみがめのなみだ』だった。『えっ？ 泣いてるの？ ああ産卵の時だな』と楽観的に考えて注文し、読んだ。全く違った。屋久島のウミガメは、珍しいウミガメを観ようとやつてくる観光客の車のライトで、海に帰る本能を狂わされ、

読書感想文というと、小学校一年生から、ほとんど生き物を扱った本を読むことが多かった。

例えば、ザリガニ・カラス・カブトムシ・

アネハヅル・ウミガメ・コウノトリなどだ。『ザリガニ』は、ザリガニ釣りを成功させて飼育したくて調べた。『カラス』は、母がいつも同じカラスと庭でやり取りをしつつ、毎日面白い戦いを繰り広げていたので（母がカラスに遊ばれていた）その本来の生態や特性が知りたくて読んだ。『カブトムシ』は、父がある時、

「カブトムシを探しに行くぞ」

と言って、山深く車を走らせたが、一匹も見つからなかつた。その時田舎育ちの母が、

「カブトは里山や。人に近い所にいたよ」と教えてくれた。行つてみると本当にいた。そこで、『どうして山奥じゃなくて里山なんだろう。』と不思議に思い、本を探していたら『カブトムシ 山に帰る』という本を見つけた。なんと、環境の変化で里山が減り、たくさんのミツを吸えなくなつたカブトムシは、少しのミツで生きていけるよ

海岸を歩き回る人々に砂浜を踏み固められ、生まれた子ガメが穴から地表に出ることができなくなつて死ぬことが多い。また捨てられたゴミは、誤食を起こしたり、海からの上陸や海へもどる時の妨げになつたりした。安心して浜に戻つて産卵できなくなるなど、ウミガメを取り巻く悪しき環境から「助けて！」と訴えているなみだだった。これからそこへ行こうとしている僕たち家族は、この本をきっかけに、ただの観光ではなく、永田いなか浜での子ガメ救出作戦に参加することにした。そして、穴から出られなくなり命を落としかけた生まれて間もない子ガメたちを海へ返す活動をした。一生懸命足をパタパタさせて海へ向かう子ガメを見つづ、「大海原の危険から身を守り、三十年後に、この浜に戻つてこいよ」と声をかけた。と同時に人間の無知から、せつからく孵化したのに穴の中で死んでしまつた子ガメの姿も見た。『何をしに人はここへ来ているのか』と疑問に思つた。

この次の年、カブトムシとウミガメが、環境の変化によつて種が変化したり、絶滅危惧種になつてしまつたりしていることに

ついて自分が住んでいる兵庫県が素晴らしい取り組みをしていると知つた。そこで読んだのが『コウノトリがおしえてくれた』という本だ。昭和四十六年日本のコウノトリの野生個体が絶滅してしまつたことに始まる。このコウノトリの最後の生息地となつた豊岡市で、もう一度復活させるための取り組みが始まつた。絶滅の原因是、巣を作る木が伐採によつてなくなつたこと、えさとなる魚などが農薬によつて汚染され、それを食べることで水銀が体に留まり病気になることがあげられる。そこで、豊岡市は外国から同種のコウノトリを譲り受けて育てると共にコウノトリが安心して過ごせるように環境改善に取り組んだ。一部の市民はリンや鉛の入つた洗剤や農薬を使うことをやめ、えさとなる魚などを育てる活動もした。森林の木の代わりに繁殖のための巣塔も立てた。そして、やつと大空にかえす日が來た。巣箱の横には、笑顔でコウノトリを見送っていた松島興治郎さんの姿があつた。松島さんはコウノトリの繁殖に最初から取り組まれた功労者だ。コウノトリの郷公園にいらつしやると知り、実際に会いに行つて話を聞いた。

「絶対に大空に返してやるという約束が果たせて、本当によかつた」と、苦勞話と共に熱く語つて下さつた。

市全体を動かし、絶滅に立ち向かわれた意志の強さに感動し、握手していただいた時には、コウノトリを優しく育てられたその手は、本当に温かかった。

十一年間の読書を振り返つた時、その時々の一冊の本が、生き物の絶滅に待つたをかけようとする人たちに、たくさん出会わせてくれた。そして、その場で考える機会を、僕に与えてくれた。読むことで心が豊かになつたり、疑問を解決したり知識を得るだけではなく、僕にとつては読書をきっかけに、現地調査をしたり人と出会つて話をしたりと、本の世界から一歩出て、とても貴重な時間を与えてくれるものだつたなど、今改めて強く感じている。

#### 体験書き

『カブトムシ 山に帰る』山口 進 汐文社  
『屋久島発 うみがめのなみだ その生態と環境』  
大牟田一美・熊澤英俊 海洋工学研究所出版部  
『コウノトリがおしえてくれた』池田 啓

## 【一ツ橋芸文教育振興会賞】

# 「おもい」をのせる便せん

奈良県立畝傍高等学校 二年

中尾茉結奈

最後に便せんに手紙を書いたのはいつだ  
ろう。

小さいころは友達と毎日手紙を交換する  
のが楽しかった。使い慣れないカタカナを  
左右反対に書いてしまったり、「だ」と「ら」  
を間違えたりしながら『○○ちゃん、らい  
すき♡』と一生懸命伝えたものである。そ  
んな私の周りもLINEの無機質な文字の  
羅列でうめつくされるようになってしまっ  
た。

鎌倉で小さな文具店を営む傍ら、先代を

引き継ぎ手紙の代書を請け負う鳩子。お悔  
やみや離婚報告など様々な依頼が舞い込ん  
でくる。驚くことに、毎回鳩子は依頼内容  
に合わせて使用する紙や筆記用具はもちろん  
、書体までも変えている。

ある日、鳩子は客室乗務員のカレンさん  
から依頼を受ける。カレンさんはどうして  
も綺麗な字が書けず子どものころからごま  
かしながら生きてきたという。彼女からの  
依頼は、義母への還暦のプレゼントに添え  
るメッセージカードの文書だ。字が汚いか

らと代筆の理由を話すカレンさん。その時  
まで、「字はその人そのものなのだ。字を  
見れば、相手がどういう人かわかる」鳩子  
も先代もそう考えていた。

ここまで読んで私は弟のことを思い出し  
た。私の弟はカレンさんと同じように頑張  
つても整った字を書くのが難しい。弟が「デ  
イスレクシア」と診断されたのは彼が小二  
の時だった。見た目では全く分からない。  
彼は友達も多く、私より物知りで学校の勉  
強もきちんと理解している。ただそれを整

つた文字で書くのが難しいという。始業式の日になると小学生の弟には教科書やドリルに名前を書くという宿題がよく出される。そういう時はたいてい少し書道を習つて、私が代筆を依頼される。そして私が代わりに書いてあげるといつも喜んでくれる。今まで苦労してきたカレンさんが鳩子の代書を見て喜んでいた姿と弟が重なつて気がつけば思わずカレンさんを応援している私がいた。カレンさんの立ち居振る舞いを見るうち鳩子は考え方を改める。

「私ずっと、誤解してたんです。字が美しいのは、きっと書く人の心がそうさせたんだってことが、カレンさんと出会つて、よくわかりました」。この言葉をいつか弟にも届けてあげたいと強く思つた。  
またある時、ずい分前に亡くなつているご主人からの手紙を待ち続いているおばあさんに天国からの手紙を届けるという依頼が鳩子のもとにきた。依頼主のおばあさんの息子が父から母へと届いた古い手紙を読んだのだという。私が昔、祖母の家に遊びに行つた時こんな出来事があつた。  
「フフッ、面白いもの見せてあげよっか？」

ママには内緒  
「ママ達が子どもの時に出した手紙やで。これがママのものかなあ」

そこにはいかにも小学生ぽい字が連ねてあつた。写真でしか見たことのない子ども時代の母が連想される。「おじいちゃん、おばあちゃん。お元気ですか。私は今運動会の練習をしています……」不思議な感覚だつた。今の私より幼い年の母の手紙を読んでいると祖母がこんな話を聞かせてくれた。曾祖母は夫が亡くなり独り身となり、ずっと住んでいた家を離れ、祖母の家の近くの団地へ越してきた。その時かなりの荷物を処分したそうである。そのさらに数年後、曾祖母はケアハウスへの入居を決心する。小さなキッチンとトイレのある部屋にベッド、仏壇など必要最低限のものだけが運び入れられたそうである。この二回の引っ越しで曾祖母の荷物は本当に少しの荷物になつてしまつた。そんな少ない荷物の中から曾祖母が亡くなつた後、クッキーの缶が見つかつたそうだ。缶の中には私の母達——

つまり曾祖母にとつての孫からの手紙がしまわれていた。  
「大事なものたくさん始末したのにこれは捨てられへんかつてんなあ、こつそり持ち��けてやつてんよ」と祖母がつぶやいた。曾祖母の想いを知つてあたたかい気持ちになつた。

手紙は書いた人の「おもい」だけでなく、受け取つた人の「おもい」も一緒にずっと残つていくものだ。時代をも越えて人の心へ届くものだと思つた。私が誰かに宛てた手紙もその人の心に残つてくれているかも知れない。

この本を読んだ人ならきっと読み終えた後こんな気持ちになつたのではないだろうか。「久しぶりに便せんに手紙を書いてみよう」気がつけば私は便せんを取りに向かつていた。誰に書こうか、何を書こうか、どんな便せんにしようか。わくわくと胸をふくらませる私はまるで小さなころの私に戻つたようだつた。

## 【二ッ橋文芸教育振興会賞】

# 音楽は神様からの贈り物

和歌山県 智辯学園和歌山高等学校 二年

清水愛萌

——「すべての人が兄弟となり、一つに  
なることを歓喜と呼ぼう」——

『棒を振る人生』指揮者は時間を彫刻す  
る』は、世界的に活躍する指揮者、佐渡裕  
さんが数々のエピソードとともに、音楽觀  
や人生觀を綴った一冊だ。私が小学五年生  
の時から所属しているオーケストラ（SK  
O）の芸術監督でもある佐渡さんが、音楽  
や人生についてどのような考え方を持つてい  
るのかを改めて知りたかったので、この本  
を読んだ。

二〇一一年の東日本大震災のときのエピ  
ソードが一番心に残った。震災が起こった  
とき、佐渡さんは無力感と戸惑いに襲われ  
たという。大災害を前にして、何かをやら  
なければいけないのに何をすればいいのか  
わからない。水一杯、毛布一枚を届ける尊  
さを知らざながら、音楽家は何もできな  
い。でも、復興祈念のためにその年の夏に  
SKOとともに被災地を訪れたとき、音楽

う人たちが、演奏を聴いて涙を流し、「私  
はやっと涙が出た」と話してくれたことが、  
佐渡さんの音楽人生の中で最も心を揺さぶ  
られた体験の一つだという。

震災以降、大切な人を亡くしたり財産を  
失つたりする中で、自分よりも大変な人が  
いるという思いを抱え、泣くことすらでき  
ない状況が続いていた被災者の方々に、音  
楽がエネルギーを与えたと知り、私は音楽  
の必要性と偉大さを改めて実感した。その  
後私もSKOに入団し、東北への復興祈念  
降、音楽なんて聴いたことがなかつたとい

演奏に参加させて頂いているが、街は少しずつでも確実に復興に向かっている一方、何回行つてもお客様は演奏を聴いて涙を流して下さることは変わらない。その度に音楽はそこにいる人に癒しや励ましを与えてくれることを再認識させられる。

そして、自分の目指す将来の姿が変わつていった。私は将来、医学に従事したいと思つてはいる。未だ治療法がなくて苦しんでいる患者さんの命を一人でも多く救いたいからだ。でも、以前の私は、進んだ医療を提供し、命を救つたり病気や怪我を回復させることしか考えてはいなかつた。「物質的な力」だ。音楽の持つ不思議な力を再認識してから、それだけでは不十分ではないかと思えてきた。目に見えることだけに捉われず、患者さん的心のケアの必要性に気づかされた。「精神的な支援」の大切さだ。また、このことは医学に限つたことではない。これまでの私は、自分が大人になつたときに震災や災害が起つたら医療従事者として社会に貢献し、人々の力になりたいとだけ考えていた。でも今は違う。被災された方は、物質的な支援と同じくらい精神的な支援を必要としている。社会的にはラ

イフラインの復活や物質の調達が注目されると、大切なものをなくした人々には癒しや慰めも不可欠だ。そして、音楽はそこには深く関わることができると佐渡さんは教えてくれ、実際に自分も体感している。音楽を通して、演奏する側と聴く側が一体となる特別な時間を創り、そこにいる全員で音楽の喜びを味わうことができる。私はこのことを忘れず、物質的、精神的の二刀流の支援ができるようになりたいと思うようになつた。

音楽をする喜びを象徴するエピソードがもう一つあつた。「一万人の第九」についてだ。「一万人の第九」は、アマチュアの一万人の合唱団が毎年ベートーヴェンの交響曲第九番を演奏するコンサートだ。普段は音楽に縁のない人が集まり、一度きりの本番で心を合わせ音楽を生み出す。佐渡さんは、声という実体感を伴うものにより歌う喜びを体感し、誰もが本能として持つてゐる「音楽を楽しみたい」という欲求に火をつけることを何よりも大切にしているという。

第九の歌詞に「神の不思議な力によって、すべての人は兄弟になる」とある。この不

思議な力は、誰もが一体となつて生きる喜びを共有できるようにする音楽の力ではないかと思う。私は、子供からお年寄りまで皆がそれぞれの人生を背負い、一万人の主人公となる「一万人の第九」のあり方に、音楽の本質を見出せる気がした。音楽によつて多くの人と喜びを共有し、家族のように繋がることができ。生きている証のようなものになるのではないかと思う。

佐渡さんは、音楽は神様からの贈り物だと言う。人によつて価値観は違ひ、生き方も異なるが、一緒に生き、それを喜びとすることが人間の本質であり、そのことを人間に教えようとして神様は音楽を作つたのではないかと。この本を通してそのことを知り得、また今、実際に体感できる環境にいる私の使命は、形のあるものに捉われる薄っぺらい人間ではなく、音楽を通じて生きる喜びを味わい、人々と共有できる、人間らしい人間になることだと思う。

#### 体験書籍

『棒を振る人生 指揮者は時間を見刻する』  
佐渡裕 P.H.P研究所

# 【二ツ橋文芸教育振興会賞】 生のかたち

愛媛県立松山東高等学校 三年

沖田英里

バレエは窮屈だ。一番美しく見える型は予め決まっていて、私たちはそれからはみ出さないように自分の身体をコントロールする。頭の先から出ている糸が天井に吊られているように背筋を伸ばしなさい。そう先生に指導される度、幼い私は自分が操り人形になつたような気持ちを抱いた。

高校で入つた創作ダンス部では、バレエを十一年間続けたおかげもあって、何度も中心で踊る機会をいただいた。ダンスの世界では容赦なく、前列のセンターから実力順に位置が振り分けられる。「私もバレエ

を習つておけばよかつた」という周りの言葉を聞く度に申し訳なさと息苦しさを抱く。そんな時、いつも私は周囲が作った「私」という虚像を壊したくて堪らなくなる。過去の経験年数も日々の葛藤も、嫉妬も羨望も劣等感も優越感も身体も名前も性別も、私を構成するありとあらゆる枠組みを全部びりびりに破いて吹き飛ばしてしまったかった。常に「内側」にはめこまれることに抗い続けた「僕」のように。

彼らはいつも「内側」にいた。大江健三郎の『芽むしり仔撃ち』の舞台は太平洋戦

争の末期。罪を犯し感化院に収容された少年たちは山奥の村に集団疎開する。その道中、何度も脱走を試みるが瀕死の状態で連れ戻されたり、周りの村人たちの好奇の目に晒されたりと、彼らに自由はなかつた。疎開先では、疫病の恐怖にさらされた村人たちに見捨てられ、置き去りにされる。唯一の交通路であつたトロッコの軌道の先が遮断されているのを見た「僕」は茫然とし、怒りで体を熱ぐする。

閉じ込められた村で、彼らは「自由の王国」を築く。狩猟を覚え、祭りを催す。「俺

たちの村さ。俺は誰からも棄てられた訳じやない」。主人公の言葉は精一杯の虚勢ではあるが、少年たちにとつて大人の監視下に置かれないのでこの共同生活は紛れもなく「自由」だったのだ。

この村の中に匿わっていた一人の脱走兵がいた。彼はいつも戦争の終わりと自らの自由を祈っていた。そんな兵士に「あんたは今だつて自由じやないか。この村の中でなら何をしててもいい」（中略）誰一人あんたを擋まえないと主人公は言う。彼らと兵士の間には乗り越えることのできない高い障壁があつた。ずっと内側である彼らに對して、兵士は戦争の勝敗や村の外に逃げた人々のことなどの外部を持ち込み、いつまでもそれに拘泥していた。

あなたは誰ですか？ 現代文の授業中に先生が聞いた。自分の名前を名乗った少女にもう一度問う。あなたは誰ですか。名前ではなく、あなたという人間が知りたいのです。——言語は現実に追いつけない。名前や生い立ちを説明したところで、私という一人の人間を表すことはできないのだ。

私たちにはわかに混乱し、恐れを抱く。ぼつかりと浮かぶ何もない空間に全てのみこ

まれていくような思いがした。言葉は私を断片的にしか切り取れないとして、私そのものはどこに存在しているのか。自分が迷子になつたような気がして、突然心細くなつた。あれほど自由になりたいと願つたにもかかわらず、いざ自分を形作つている要素を全て取り上げられたら不安になる。一体自由とは何なのだろう。

丸山眞男さんの『『である』ことと「する』こと』に、次のように書かれた文章がある。自分が「捉われている」ことを痛切に意識し、自分の「偏向」性をいつも見つめている者は、何とかして、ヨリ自由に物事を認識し判断したいという努力をすることによって、相対的に自由になり得るチャンスに恵まれてる、というものだ。

また、「自由」という言葉を辞書で調べてみると、自由は一定の前提条件の上で成立しているため無条件的な絶対の自由は人間にはない、とあつた。胸にストンと落ちた。人は完全に自由になることなどできないのだ。何かしらの制限があつて初めて私は自由を獲得することができる。

やがて帰還した村人たちは、主人公たちを幽閉した事実を隠蔽しようと嘘を強要す

る。その脅しに最後まで抵抗した主人公は村から追放される。「僕は閉じこめられていたどんづまりから、外へ追放されようとしていた。しかし外側でも僕はあいかわらず閉じこめられているだろう。脱出してしまうことは決してできない。内側でも外側でも僕をひねりつぶし締めつけるための硬い指、荒あらしい腕は根気づよく待ちうけているのだ」。

私たちは生きている限り外側に憧れながら「内側」にとどまり続けるのだろう。不本意な枠に押し込められながら、また自分も誰かを枠にはめながら、その中でより自由な生き方を目指してもがきながら生きていく。それが私たちの生のかたちなのだ。芸術は自由になるためにあるのかもしれない。「型があるから型破り。型がなければそれは型無し」。歌舞伎の十八代中村勘三郎さんの言葉だ。鏡の前でボーズを確認する。今まで習得した型を守りながら、背筋を伸ばした。一本の真っ直ぐな糸が私の背中から天高くどこまでも伸びていくように。

# 変身と自由

作家

辻原 登

『変身』を読むという経験は、一度死んで甦るという通過儀礼に等しい。この作品を寓意として読むのは誤りで、グレーゴルの身に起きたことを追体験して、自分が朝目覚めて、途方もない虫に変わつていて、そこにホッとする、それが貴重なのだ。しかし、ひょっとして、そんなことが自分の身に起きてほしいと考えることも自由なので、池田涉君は本当は翌朝目覚めて、何事もなかつたこと、池田涉でしかなかつたことを残念がっているのかもしれない。

変身願望は『遠野物語』の世界を旅して』（井崎英里）にもうかがえる。「流れる景色一つ一つが物語の世界と重なる」と書く井崎さんは、デンデラ野を駆け抜ける風となつて、新時代のオシラサマや河童を、あるいは私達が全く知らない、しかしながら不思議な世界の住人を連れて来てくれそうだ。

そのためには、人は必ず、「言葉の森」（津田朔）に彷徨わなければならない。古代から現代にかけて、人々は「言葉にならない感情」つまり自分の想像の域より大きかつたものに向き合つた時、それを何とか表現しようともがき続けて来た。津田さんはこれからも言葉の森の旅人（狩人と言つてもいい）であり続けようとする。恐らくそれは、谷栄里さんが書くように、「私

は誰かの副詞句でありたい。何かを与えられる存在になりたい。世界を網のように「織りなす幸福な文の糸ぎ手になる」という決意へと繋がる。

『読書が与えてくれたこと』は何かと云うと、「本の世界から一歩出ることだ」と書く木船幸太君の認識は鋭い。生き物についての、彼の精細で魅惑的な文章がそれを証している。カラスと対話したり、カブトムシのありかを的確に指摘するお母さんのチャーミングなこと！

「フフッ、面白いもの見せてあげよつか？」ママには内緒」と言って、（私）（中尾茉結奈さん）の祖母がクッキーの缶から取り出したのは、（私）の母が子供の時、おばあちゃん（私の曾祖母）に出したかわいい手紙。四つの世代のおもいが虹のように繋がった。

正しい文章というものがある。それは読む人のすべてを納得させ、思考と行動に赴かせる力を持つ文章のことだ。『音楽は神様からの贈り物』（清水愛萌）はそのような文章で綴られていて、「文章（文学）は人類からの贈り物」と言い替えられそうだ。

『生のかたち』（沖田英里）は、『蚊と変身』に共通するテーマを扱っている。例えば、『変身』と『自由』という言葉を入れ替えてみるのも面白いだろう。

バレエのポーズについて、冒頭の「頭の先から出ている糸が天井に吊られているように背筋を伸ばす（上から下へ）が、ラストで「背筋を伸ばした。一本の真っ直ぐな糸が私の背中から天高くどこまでも伸びていくように」（下から上へ）と反転する生のかたち（変身と自由）が鮮やかだ。

選外となつた作品についても触れておきたい。

『ミルク・クラウン』（北田なつき）と『愛のある世界』（古川咲希）の才氣溢る書きぶりに魅せられた。それぞれ、「牛乳が嫌いだ」「私は植物を育てることができない」と始まる。そして、あれこれの末、結局それを克服できない、というよりそういう自分を受け入れようと決意する。一見、ネガティブ・ラヴを謳うかのようだが、実は一巡りしてユーモアに転じているのである。ユーモアは生の肯定から生まれる。

『私と姉のハーモニー』（瀬戸みらい）の一番の良さは、読書の時間と、本に関係ない（私）の現実の生活が並行して語られている点だ。本の中の、家を出た兄が七年後、女装して帰つて来る物語と、（私）の姉の一年振りの帰郷と和解が描かれて、読書の時間と現実の時間が縫り合わされて、一つになる。その時、（私）は人生の大切な意味を会得する。姉の表情の変化を巧みに捉えたセンスが輝く。

# 言葉と現実

歌人

# 穂村 弘

『蚊と変身』では、現実の「蚊」と作中人物の比較を通して、「変身とはグレーゴルの姿が虫になつたことではなく、彼をとりまく環境が虫用のものになつたことをさすのではないだろうか」という認識が示されている。「姿」のように固定されたものではなく、変わり続ける周囲との関係性こそが〈私〉を決定づけるという捉え方が鋭い。そう考へると、私たちは自分一人ではコントロールできないところにその根拠を預けていることになる。「引越や進学などによる環境の変化も、大きな意味でどちらかば変身なのだから変身は万人に起ることだと見える」という展開も意外に見えたがら説得力がある。その不安を心の奥で万人が感じ取っているからこそ、『変身』が名作とされるのだろう。

『言葉の森』を彷徨う』の中心には、現に感じている思いと言葉のズレについての問題意識がある。タイトルは「少年も、ついに言葉の森に足を踏みいれたか」という作中人物の言葉から取られているのだが、この読書体験記の作者のように「言葉にならない感情」を大切にしたいと願う者だけが「言葉の森」を彷徨うことになるのだ。その切実さに胸を打たれる。『遠野物語』の世界を旅して』には、「遠野物語」の作者である柳田国男の来訪から110年後の遠野の姿が描かれている。

フィールドワークの実感として記された「昔話ではなく取材記事なのだ」という一文が印象的だ。そこで得たものを自らの地元にある広瀬川伝説の調査に結びつけているところもいい。土地に流れ歴史に繋がつてゆく感覺に惹かれた。

『生と死を認識するもの』は、幼い頃に好きだった絵本ではなく、読まれたくなかった絵本について書いているところが面白い。「私はただ嫌だったのだ。ねこが死ぬということが、母が、優しい声で「ねこはもう、けつして生きかえりませんでした」と言うことが、死の余韻を残して眠るといふことが、何よりも恐ろしかった」という文章の臨場感が素晴らしい。その気持ちはよくわかる。記憶の中の「母」を鍵として提示された「生と死は、私たちが他者への愛情というフィルターを通して書くのか知らないということもある。子ども時代の母親の「いかにも小学生ぽい字」を見た時、作者の中に「不思議な感覺」が生まれたという。「今私のより幼い年の母の手紙を読んでいる」という逆転した感覺の中で、時間、血縁、成長、死などをさまざまな要素が直観的に把握されているようだ。『音楽は神様からの贈り物』には、音楽の価値を言葉で捉え直そうとする意識が見られる。読書を通して、「水一杯、毛布一枚を届ける尊さを知らされながら、音楽家は何もできない」という震災時の無力感とそこからの回復を知る。さらに本の著者と共にした演奏による追体験が「物質的な力」とは別の「精神的な支援」への気づきに繋がつてゆく。「物質的、精神的の二刀流の支援ができるようになりたい」。作者自身の将来の夢を変えた読書と演奏の力を思う。『生のかたち』では、バレエのような身体感覺と文学的な概念を擦り合わせた「自由」についての考察が試みられている。『私たちは生きている限り外側に憧れながら「内側」にとどまり続ける』とは、直接的には体験書籍『芽むしり仔撃ち』についてのコメントでありながら、身体から脱出できない我々の在り方を想させる。言語体験と身体感覺を両輪として認識が深められてゆく様子がスリリングだ。

# 「今」の読書と体験

作家

角田光代

『生のかたち』を書いた沖田英里さんは、長年続いているバレエを通して、内側と外側、不自由と

自由について考察を重ねている。型があるからこそ、そこから生まれる自由があるというのは、自

身の身体感覚から得たひとつの真実だと思う。

『おもい』をのせる便せんの中尾茉結奈さんは、

『ツバキ文具店』を読み、手紙というものの本質に気づく。字が汚いことも文章がつたないことも、

手紙の本質ではない。また、書いた人の「おもい」だけではなく、受け取った人の「おもい」も手紙といつしょに残っていく、という文章には、私もあらためてそのことに気づかされた。幼いころの母親の手紙のエピソードが印象深い。

『生と死を認識するもの』のなかで、谷葉里さんは、一冊の絵本を通じ、愛することと死ぬこと、生きることについて、みずみずしくすなおな文章で考察している。「愛すること」は、能動態ではなく受動態であるという気づきは、非常に興味深かつた。

木舎幸太さんの『読書が与えてくれたこと』が、私はとても新鮮だった。行動的な母親と、田舎の生物にくわしい母親、そして生きもの全体が好きなのだろう書き手自身が、文章のなかに生き生きと息づいている。カブトムシ、ウミガメ、コウ

ノトリと、三冊の本を取り上げているのもユニクだ。書物と世界が、木舎さんの文章でダイナミックに融合している。

『音楽は神様からの贈り物』の清水愛萌さんは、一冊の本を通して音楽の力を知る。音楽は人に寄り添い、人を救う。そして清水さんは自身の将来についても考えなおす。「一緒に生き、それを喜びとすることが人間の本質であり——」という文章は、読んだ本からの抜粋ではあるけれど、きっときちんと咀嚼したからだろう、清水さん自身の声のように堂々と響いて、感動した。

津田朔さんの『言葉の森』を彷彿う』の文章は端整で読みやすく、津田さんの思いをまつすぐ伝えている。経験が言葉を超えたときの違和感を無視せず捉え、その違和感の正体を小説のなかに見つけている。津田さんの文章は、とても誠実で、そこが大きな魅力だ。

『遠野物語』に魅了され、一度ならず遠野を訪れている井崎さんの行動力はすごい。そしてこの体験記のなかで、遠野という場所の特殊性を、自分の言葉できちんと捉えていると思う。『遠野物語』は昔話ではなく取材記事、というところも、たしかにそうだとあらためて思われる。この先井崎さ

れた、過去の、あるいは現代の取材記事を、独自に書いていてほしいと思った。

池田涉さんの『蚊と変身』は力強い文章で綴られる。ここでの思考と気づきは、小説を読むこと、現実のなかで考えること、そして自身の言葉で書くこと、という一連のなかで生まれたものだ。つまりこの文章のなかで池田さんが出した結論は、肉声となって息づいている。だから説得力がある。きっと池田さんのこの結論は、年齢を重ねることによって変わっていく。だからここに、今の——何にもまだ変身していない池田さん自身を書き記しておいてよかつたと思う。

だれしもが、高校生である今しかできない読書をし、今しかできない体験と思考を重ねている。この「今」がいつか、高校生のみなさんを、ずっと遠く、それぞれが希望する広い世界へ連れていくってくれることを私は望む。

# 読書すること、成長すること

文部科学省  
初等中等教育局主任視学官

## 長尾篤志

『遠野物語』の世界を旅して』は、静かな印象を与える書き出しで始まっている。その書き出しに読む者を『遠野物語』の世界に誘うとともに井崎さんはやる気持ちを抑えようとする思いを感じさせる。井崎さんは『遠野物語』に登場する名所等を訪問してそれぞれの所で物語の場面を感じ取り、さらに地元の広瀬川周辺の伝説を聞き取っている。グローバル化が強調される時代であるからこそ、むしろ地域で生きる人々の生活や息遣いを大切にしたいという意志を感じる。

『蚊と変身』は、『変身』を池田さんのように読むこともできるな、と考えさせられた。人が生きていく時、突然、他者から突き付けられる不条理も少なくない。現実の世界で、朝、目覚めたら虫になっていたという経験をすることはほぼあり得ないだろうが、周りの環境が大きく変わっていたということは十分あり得る。その思索の道筋を自分にまとわりつく蚊を用いてうまく表現している。

『生と死を認識するもの』は、読む者に愛するとの意味を問い合わせる読書体験記である。多くの子供にとって、物語の最後はハッピーエンドが望ましいが、『100万回生きたねこ』はそうではない。しかし、愛することを知ったからこそ生を自

覚し、死に至つたと考えれば納得がいく。鍵となる「愛するという受動態の文」という矛盾しているように感じる表現に深く考えさせられた。

『言葉の森』を彷彿とし、多くの人が感じる気持ちをうまくまとめている。私も、高校生や大学生の頃、自分の思いや感情を言葉にした瞬間、自分の思いや感情とはズレていると感じることが幾度もあった。それを「言葉に真摯に向き合い始めた証」と捉えれば、高校生や大学生の頃というのも納得がいく。この読書体験記の終盤に、老詩人が少年を「五十嵐くん」と呼ぶことを「少年を一番表す言葉で呼ぶことを認めた」と述べている。それぞれの人を固有名で呼ぶことの意味を再認識させられる言葉である。

『読書が与えてくれたこと』は、少し変わってはいるが面白い読書体験記である。木船さんは「読書をきっかけに、現地調査をしたり人と出会って話をしたり」と述べている。読書が具体的な行動となり、その行動が木船さんを多くの人と出会わせ成長させることにつながっている。

『おもい』をのせる便せん』は、手紙を書くこと、手紙を受け取ること、手紙そのもののおもみを考えさせるものである。私自身も幼かった息子たちが私宛に書いてくれた手紙を捨てられずにい

る。字も書かれたことも稚拙だが、その手紙を見たびに当時の息子たちの表情も話し方もよく見ていた服の色まで思い出す。スマートフォンなど簡単にメッセージを送ることができる時代だからこそ大切にすべきことなのだろう。

『音楽は神様からの贈り物』は、音楽の素晴らしさをストレートに表現している。何かを使って音を出してそれを楽しんだり、音に合わせて歌を歌つたりすることは、人類が最も早く見いだしたことの一つではないだろうか？論語にも「三月肉の味を知らず」という言葉があるが、実際、音楽は人の心を震わせ、癒したり、励ましたり、喜びを与えてたりするものなのだろう。取り上げられている佐渡裕さんのエピソードもよい。

『生のかたち』は、大江健三郎の『芽むしり仔撃ち』をもとに自由について考えたものである。高校生のころ多くの人が自由を求め、自由について思考を巡らせるのではないか？沖田さんは、「無条件的な絶対の自由は人間にはない」という辞書の言葉が胸にストンと落ちたという。そのことをバレエを象徴的に用いてうまく表現している。

# 探究學習の一手法として

全国高等学校長協会

# 小林正人

次期学習指導要領のキーワードは「主体的・対話的で深い学び」と「探究」です。この二つに読書体験を欠かすことができないのは言うまでもありません。ところが文科省が調査した平成29年ににおける高校生の不読（1箇月に1冊も本を読まない）率は50・4%と高校生の二人に一人が本を読まないという極めて残念な結果になっています。

こうした状況の中、今回で39回目となつた本コンクールに全国から9万編を超える応募があることは、誠に意義深いものであると思います。全国の応募者並びにご指導くださつている先生方に衷心より敬意を表したいと存じます。

文部科学大臣賞となつた池田涉さんの『蚊と変身』は自分が叩いて殺した蚊とグレーゴルの死との違和感から思考をはじめています。そして「彼を虫たらしめていたのは周囲の人間」とし、さらに「自分という存在は他者との関わりの中でかたづくられる」とし、この人格をスライムに喩えています。この喩えは秀逸です。そうして「変身」は周囲の変化によるものでいつでも起こつていることだとして、この小説の持つ普遍性を指摘します。冒頭にこの「蚊」のエピソードが入ることで、作品論に偏り過ぎず、読書体験記となつたのが良かつたと思います。ですから最後の一行も

○です。

全国高等学校長協会賞となつた井崎英里さんの『遠野物語』の世界を旅しては文章力を感じさせれる秀作です。遠野へは2度目の訪問ということですが、見聞した内容が見えてくるかのような筆致で「私の知る物語に、色や匂い、温度が加わる」とはそういう書けるものではありません。自然、地理、風俗文化が織り込まれ立派な「探究」学習にもなり得ています。最後の一文も素晴らしい。

同賞のもう一つが津田湖さんの『言葉の森』を彷徨うです。「言葉になつていらない感情を無理やり言葉にすることが本当に辛く」と言葉が持つ本質的な欠陥を自ら感じた違和感で表現しています。それが『あたらしい図鑑』に出会うことでの言葉と向き合い続けば、自分に一番近い言葉が分かること光明を見出し「これからも言葉の森の旅人であり続ける」と結んでいます。津田さんの言葉に対する感性の高さが伝わつてくる作品です。

以下の5編が一ツ橋文芸教育振興会賞です。谷栄里さんの『生と死を認識するもの』は子どものころから何度も読み聞かせられてきた「100万回生きたねこ」から「死」を思考しながら「かわいがる」から「愛（情）」を交え、「生と死」への思索を深めています。「母」への眼差しにも愛が

感じられます。木船幸太さんの『読書が与えてくれたこと』は受賞作の中では異例の3冊を取り上げ、それが全て生物に関係する本となっています。このコンクールの名称が「読書体験記」となつてるのはこのような作品も評価しようという意図に基づいています。こちらも探究學習の一手法となるような実体験がリアルに描かれた作品となっています。中尾茉結奈さんの『おもい』をのせる便せんは表題からしてひらがなを意識して用いていることに象徴されているように独特のふうわり感があります。弟の診断内容、祖母とのエピソードが読み手のところをあたたかくさせます。清水愛萌さんの『音楽は神様からの贈り物』は音楽の持つ本質的な力をストレートに書いています。医学を志す清水さんがこの本を読むことで「物質的な力」だけでなく「精神的な支援」の大切さに気付く過程が文字どおりの読書体験記となっています。沖田英里さんの『生のかたち』は「内側」と「外側」をキーワードに冒頭と終結部との対比等全体の構成も巧みに書かれ、「自由」を自分なりに理解した箇所も秀逸です。

第40回目という節目を迎える次年度が今から楽しみです。

# 第39回「全国高校生読書体験記コンクール」入賞者（敬称略）

## 【優良賞】 39編

北海道	道立	札幌南高等学校	二年	山内爾子	「おす登あく」、願いを開く
青森県	県立	八戸高等学校	三年	久保光彰	『覚悟の磨き方』とは
岩手県	県立	盛岡第四高等学校	二年	北田なつき	ミルク・クラウン
秋田県	県立	秋田北高等学校	一年	安倍実織	私の道
山形県	県立	米沢興譲館高等学校	一年	佐原芽依	『日日是好日』から学ぶ
福島県	県立	会津高等学校	二年	丸山渚	震災の川を越える
栃木県	県立	真岡女子高等学校	一年	稻田彩那	完璧じゃなくても幸せ
群馬県	県立	高崎女子高等学校	一年	金子暖	一声の強さ
埼玉県	私立	星野高等学校	三年	植木野々花	言葉の温度
神奈川県	私立	聖ヨゼフ学園高等学校	二年	古川咲希	愛のある世界
新潟県	県立	新潟高等学校	一年	山田朱凜	ボランティアの価値
富山県	県立	富山中部高等学校	二年	山多真由	ガネーシャの教え
石川県	県立	金沢泉丘高等学校	三年	袖元継	小説の自由
福井県	県立	大野高等学校	二年	澤田晴	存在意義
山梨県	県立	吉田高等学校	一年	出射悠羽	自分らしく咲く
長野県	私立	松本第一高等学校	二年	船越彩那	尊厳死について考える
岐阜県	県立	大垣北高等学校	一年	岩井ゆらら	カツコ悪い「自分」
静岡県	市立	浜松市立高等学校	三年	柿和佳奈	救いとこれから
愛知県	県立	豊田西高等学校	一年	遠藤あおい	私という生き方
三重県	私立	セントヨゼフ女子学園高等学校	一年	泉山愛	私を変えてくれた本
滋賀県	県立	水口東高等学校	二年	森初菜	一人に慣れれば、道は拓ける。
京都府	府立	桂高等学校	三年	切島温子	「ホスピタルクラウン」という生き方
大阪府	府立	天王寺高等学校	二年	片岡琢雄	橋を架けたい
鳥取県	県立	米子東高等学校	二年	多田百世	生きる、死ぬ
島根県	県立	益田高等学校	二年	菅田悠乃	孤独と向き合う

岡山県	県立	倉敷商業高等学校	二年	梶原琴音	個性を生かす生き方
広島県	私立	ノートルダム清心高等学校	二年	伊藤詩	父と中也と私
山口県	私立	野田学園高等学校	一年	河村樹里	天使の翼は永遠に生えない
徳島県	私立	徳島文理高等学校	一年	大濱菜々子	この川を越えられたなら
香川県	県立	高松高等学校	一年	岡 美晴	自分との付き合い方
高知県	私立	高知学芸高等学校	二年	濱田新太	二度と忘れない記憶
福岡県	県立	筑紫丘高等学校	二年	杉永珠乙	ただし空気抵抗は考えないものとする
佐賀県	県立	鳥栖高等学校	二年	立石美月	見えない贈り物
長崎県	県立	長崎南高等学校	二年	内山遼人	コンビ二人間とは?
熊本県	県立	小川工業高等学校	二年	古澤孝光	仕事と理想
大分県	県立	芸術緑丘高等学校	三年	瀬戸みらい	私と姉のハーモニー
宮崎県	県立	都農高等学校	二年	野辺愛華	『いやし犬まる』が教えてくれたこと
鹿児島	県立	出水高等学校	二年	田中万夢	写真と記憶
沖縄県	県立	名護高等学校	二年	當眞叶	ほんとうの努力
<b>【入選】 187編 (各県の校名・氏名は五十音順)</b>					
北海道	道立	旭川北高等学校	二年	妻沼空那	「もちつもたれつ」ないい関係
	道立	帯広柏葉高等学校	一年	原 心海	「普通」であること
	道立	札幌月寒高等学校	二年	矢島 実	玄白と良沢の信念
	道立	札幌南陵高等学校	二年	奥平奈生	「今」を生きるために考える
青森県	私立	松風塾高等学校	三年	櫻田結太	愛の鎖
	県立	八戸高等学校	一年	田中愛莉	繋がりを信じて
	県立	八戸高等学校	二年	香香美空	ザ・ヘイト・ユー・ギヴ:あなたがくれた苦しみ
	県立	八戸商業高等学校	二年	石山結香子	『ヒマラヤに学校をつくる』を読んで
岩手県	県立	花巻北高等学校	二年	佐藤 蒼	アツコちゃん
	県立	水沢高等学校	二年	佐藤華笑	精神的な弓道
	県立	盛岡第一高等学校	一年	榎原乃愛	強さと偉大さ
宮城県	県立	佐沼高等学校	二年	江口 翠	つめこんで、ゆさぶつて、空っぽにする

		県立	仙台二華高等学校	三年	伊勢亮子	あるいはそれが逆説的な本当であつた
		県立	仙台南高等学校	一年	宮田悠加	音楽の持つ力
		県立	松山高等学校	二年	大久保さゆき	新発見、私
秋田県	県立	大館桂桜高等学校	二年	北林詩野	姉の中の眞実	
	県立	大館桂桜高等学校	二年	佐藤瑞葉	幸せ	
	県立	大館桂桜高等学校	二年	長谷部沙樹	地図のサイズ	
	県立	十和田高等学校	二年	藤田葉月	伝えたいた人がいます	
山形県	県立	小国高等学校	二年	舟山未羽	若者たちはオグニマチで何を企てているか？	
	県立	山形西高等学校	三年	秋葉海咲	仲間の大切さ	
	県立	山形工業高等学校	三年	押切温希	A Iとの共存	
福島県	県立	会津高等学校	一年	池野瑠実奈	私の好きな私であれ	
	県立	安積黎明高等学校	一年	新國由奈	「今の尊さ」を知る	
	県立	安積黎明高等学校	一年	塩田智那	過去から今へ	
	県立	須賀川高等学校	一年	石井きらら	平和のアシとなる	
茨城県	県立	土浦第二高等学校	一年	瀧ヶ崎萌子	私が輝けるとき	
	私立	水戸啓明高等学校	一年	伊勢山透愛	笑顔の消えた民族	
	県立	水戸第一高等学校	一年	青木大翔	私に勇気をくれた人	
	県立	水戸第一高等学校	一年	紺野翔真	義は人の道なり	
栃木県	県立	宇都宮高等学校	一年	大山幹生	「分かる」を分かることで見えた自分の改善点	
	県立	宇都宮高等学校	一年	小池俊太郎	無慈悲な神様	
	県立	宇都宮女子高等学校	一年	大谷梨華	ねじ曲がる事実	
	県立	宇都宮女子高等学校	一年	関咲侑花	好きこそが才能	
	国立	小山工業高等専門学校	二年	木村日菜子	心に寄り添うために	
群馬県	私立	共愛学園高等学校	二年	後藤亜友	『武士の絵日記』が語る「豊かな」暮らし	
	県立	桐生女子高等学校	一年	前村美羽	自分という存在	
埼玉県	県立	渋川女子高等学校	二年	塩原采果	あの時とこれから	
	私立	鶴明高等学校	二年	吉松美栞	世界の違いと視点の違い	
	私立	栄北高等学校	一年	中山湧太	少女（因果応報）	
私立	星野高等学校	二年	渡辺瑞季	家族の存在とは		

千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	一年	石濱日菜	トライアル・アンド・エラー
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	一年	奥田桂世	自分の殻を破る一步
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	二年	山崎陽太	聴覚障害の克服
	県立	東葛飾高等学校	二年	小林はる	視野を広げて
東京都	私立	女子学院高等学校	一年	前田実咲	未来の決定権は私にある
	私立	白百合学園高等学校	一年	藤川芽生	私にも好きなものがある
	私立	早稲田大学系属早稲田実業学校高等部	三年	小坂祐生	知性という力
	私立	早稲田大学系属早稲田実業学校高等部	三年	芹川史枝奈	「過去の歴史」から「生きた未来」へ
神奈川県	私立	湘南工科大学附属高等学校	一年	相澤麟太郎	不器用だからこそ、諦めない。
	私立	湘南工科大学附属高等学校	一年	稻田美月	最悪な読者
	私立	聖セシリア女子高等学校	二年	杉浦萌夏	戦争・原爆の歴史を通して見えてくるもの
	私立	聖ヨゼフ学園高等学校	二年	相川綾音	理解することとされること
新潟県	県立	高田北城高等学校	一年	小林楓河	「生きていくこと」・「死んでいくこと」の意味
	県立	高田北城高等学校	一年	萩原なみ	ちいちゃんが教えてくれたこと
	県立	新潟高等学校	一年	中山慎太郎	境界線で揺れる私たち
	私立	新潟清心女子高等学校	一年	小林紗也	灯台もと暗し
富山県	県立	高岡南高等学校	一年	大角風歌	一分間の沈黙
	県立	砺波高等学校	二年	市村友里	誰もが輝くために
	県立	富山商業高等学校	一年	田部央	走るということ
	県立	富山商業高等学校	二年	坂下優成	戦争から学んだこと
石川県	県立	金沢桜丘高等学校	二年	坂井藍	変わらる決心
	県立	金沢大学附属高等学校	二年	小坂桃香	「今」を伝える道しるべ
	県立	金沢西高等学校	二年	山崎うた	手紙屋
	県立	金沢二水高等学校	一年	小西麻友	寄り添うこと
福井県	県立	羽水高等学校	三年	青山櫻子	王子さまとバラ
	県立	藤島高等学校	一年	渋谷泉	タイムマシンなんていらない
	県立	藤島高等学校	二年	廣田万由子	ゲーム中毒奮闘記
	県立	若狭高等学校	三年	風呂樹	コミュニケーションとディベート
山梨県	県立	上野原高等学校	二年	片岡凜	心の抛り所があるのは大切なこと
	県立	甲府東高等学校	一年	渡邊優那	叶うなら私は梢の漫画を読みたい

		県立	都留高等学校	二年	高山恭輔	未来に願う素敵な出会い～音楽と私～
		県立	身延高等学校	三年	望月奏汰	完璧じゃなくていい
長野県	市立	長野市立長野高等学校	一年	松井 笑	障害者の本	
	私立	松本第一高等学校	一年	須々木望恵	世界のために出来ること	
	私立	松本第一高等学校	一年	山崎梓暖	共鳴	
	私立	松本第一高等学校	二年	宮澤京奈	泰然自若	
岐阜県	県立	大垣北高等学校	一年	谷口依里	過去と現在と未來	
	県立	大垣南高等学校	二年	堀田うらら	信用される自分になるために	
	県立	岐阜北高等学校	一年	羽賀桃花	ジョンから学ぶ生き方	
	県立	不破高等学校	二年	恩田健佑	いただきますの重み	
静岡県	県立	磐田北高等学校	二年	神原星来	李徵と私、何が違う？	
	私立	静岡雙葉高等学校	三年	杉山葵子	「日本のデザイン」を見つめ直す	
	県立	浜松湖南高等学校	二年	和田凜夏	私たちは「健常者」と言えるのか	
	私立	不二聖心女子学院高等学校	二年	大津亜矢香	彼らと私を繰ぐもの	
愛知県	県立	岡崎聾学校高等部	二年	杉森 心	一步踏み出せた私	
	私立	柏山女子学園高等学校	二年	竹内加穂子	弟へ、ありがとう	
	県立	豊橋東高等学校	一年	田㟢七海	『みんな』の中の『私』	
	県立	三好高等学校	三年	兵藤 雅	栗の木と又三郎の精	
三重県	私立	暁高等学校	二年	大川内理紗	「死」と向き合う	
	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	間瀬萌々子	灰色の達成感	
	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	山田りょう	考え方の違い	
	県立	名張青峰高等学校	一年	今井夏陽	「知る努力」と「する努力」	
滋賀県	県立	安曇川高等学校	二年	木津七緒子	人間の性質	
	県立	高島高等学校	二年	藤橋小梅	逢いたい	
	県立	米原高等学校	二年	森本望月	感謝状	
京都府	県立	水口東高等学校	二年	阪下千聖	ありのままの自分を魅せる	
	府立	鴨沂高等学校	二年	石原彩羽	生きる力	
	府立	桂高等学校	一年	細井颯汰	私は「平和」が嫌いだった 命のカウントダウン	
私立	京都女子高等学校	二年	片岡春香			
府立	洛西高等学校	一年	青山茉由	『命の授業』		

大阪府	市立	大阪市立南高等学校	一年	下村天乃	愛なき世界で恋をする	
	府立	大阪南視覚支援学校高等部	三年	分部元	行動する勇気	
	府立	天王寺高等学校	一年	上阪千春	差別と分断を乗り越えて	
兵庫県	県立	天王寺高等学校	一年	本田莉子	言葉の海を渡る	
	県立	香寺高等学校	一年	神戸柚香莉	ドブネズミみたいに	
	県立	神戸高等学校	一年	足立遼太	出会いと変化	
奈良県	県立	飾磨工業高等学校	二年	蒲田一磨	気持ち	
	県立	姫路西高等学校	一年	玉作青葉	才能	
	県立	畝傍高等学校	一年	田中真衣	ピアノと共に	
	県立	畝傍高等学校	一年	増田奈々	大切な存在	
	県立	青翔高等学校	一年	阿部空也	平和への決意を改めて	
	県立	青翔高等学校	二年	飯田璃香	精神のスポーツ	
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	井辺節子	自己犠牲の精神	
	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	岡田華奈	青の方程式	
	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	峯奈那	居場所のはなし	
	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	幸田愛子	イギリス、アメリカ、日本	
鳥取県	私立	鳥取敬愛高等学校	二年	景山好羽	「普通」のありかた	
	県立	鳥取西高等学校	一年	岸本彩希	普通じゃなくてもいい	
	県立	鳥取東高等学校	一年	石原史子	じーじと私	
	私立	湯梨浜学園高等学校	一年	久保田菜子	自分を変える	
島根県	県立	大社高等学校	一年	江角麗南	自分と水墨画を繋いだ線	
	県立	津和野高等学校	二年	池本次朗	私と水墨画を繋いだ線	
	県立	津和野高等学校	二年	永海知夏	自分改革	
	県立	松江南高等学校	一年	西村和華	生きる希望	
	県立	横田高等学校	一年	楠琉々華	私のヒーロー	
岡山県	県立	倉敷天城高等学校	二年	浅原杏奈	向日葵を咲かせるために	
	県立	倉敷商業高等学校	一年	出射颯大	辞書について	
	私立	創志学園高等学校	三年	大竹逸太	『コーヒーが冷めないうちに』を読んで	
	国立	津山工業高等専門学校	三年	由藤一葉	「選ばれた人」にならないように	
広島県	県立	大門高等学校	一年	谷成葉	いただきますの前に	

市立	広島市立沼田高等学校	一年	山田野の華	待つ
市立	広島市立美鈴が丘高等学校	二年	荒井 優	私の箱根駅伝
山口県	県立 熊毛南高等学校	一年	榎原僚希	一日を大切に
	県立 下関西高等学校	一年	濱田真結	点燈夫との出会いと私の選択
	県立 徳山高等学校	二年	宮川真衣	色死という再生
	県立 德山高等学校	二年	寄元海渡	成功するには
徳島県	県立 阿波高等学校	二年	山本聖華	私とつての友達とは
	県立 徳島北高等学校	二年	森 愛音	作者のあの娘は「私」でもあった
	県立 徳島北高等学校	二年	八木梨紗子	魔法をもとめて
	市立 德島市立高等学校	一年	野田あさひ	家族の大切さ
香川県	県立 高松高等学校	一年	岡野明莉	いま、伝えたい
	市立 高松第一高等学校	一年	中村瑞希	チユーバと私の森
	県立 高松西高等学校	二年	鎌田龍佑	書に生きる
	県立 丸亀高等学校	二年	林 里奈	本当の世界を見るためには
愛媛県	県立 伊予農業高等学校	一年	濱岡純平	人の幸せは、命の長さではないのです
	県立 新居浜西高等学校	二年	堤 さと子	教えて！みすゞ先生
	県立 松山西中等教育学校	五年	富岡珠里	デューケの世界に憧れて
	県立 松山東高等学校	三年	内田実結	希望の扉
高知県	県立 高知小津高等学校	一年	吉森夏実	家族とは
	私立 高知学芸高等学校	二年	岩崎凜乃	生死の連鎖
	私立 高知学芸高等学校	二年	上岡彩良	私が出会う人へ
	県立 高知農業高等学校	三年	吉村愛里	私は私のままでいい
	県立 敬愛高等学校	二年	益戸美夢景	虹の先にあるもの
福岡県	私立 敬愛高等学校	二年	堺 乃亜	ピーターパン研究家への道
	県立 修猷館高等学校	一年	杉山弥優	未来予想図
	県立 東筑高等学校	二年	岸本冬陽	学ぶということ
佐賀県	県立 門司大翔館高等学校	二年	山添妃奈	今という瞬間を生きる
	県立 唐津東高等学校	二年	藤井 音	手紙が繋ぐもの
	県立 鳥栖商業高等学校	二年	伊東杏菜	さがしもの
私立	県立 鳥栖商業高等学校	一年	内田真緒	他人の優しさに気付くとき

長崎県	県立	壱岐高等学校	二年	白石萌恵	かがみとの対峙
県立	県立	諫早高等学校	二年	永武摩梨	自分だけの色に向かって
県立	県立	佐世保西高等学校	一年	峰松 晏	スマイル
熊本県	県立	宇土高等学校	一年	加悦 靖智	必要最小限の先に見えたもの
大分県	県立	鹿本高等学校	一年	松本 渉	夢への一步
県立	県立	鹿本高等学校	一年	森本貴幸	この夏、僕は変わった
市立	市立	熊本市立必由館高等学校	二年	津辺清花	「才能」に縛られない
県立	県立	大分上野丘高等学校	二年	岡田真綾	進むために折れること
私立	私立	大分東明高等学校	一年	杉安幸輝	母国では戦争があつた
県立	県立	杵築高等学校	二年	田原綺乃	文字で伝える
県立	県立	芸術緑丘高等学校	二年	藤内花恋	学び、行きつく先は
宮崎県	私立	聖心ウルスラ学園聰明中学校高等部	二年	日高 早	言葉の船を編む
県立	県立	都城泉ヶ丘高等学校	一年	菊池京子	新たな時代と平和
県立	県立	宮崎大宮高等学校	一年	福山凌右	園芸と私
県立	県立	宮崎南高等学校	二年	徳永陽子	みんなちがつてみんないい
鹿児島県	市立	出水市立出水商業高等学校	三年	植崎詩菜乃	私だけの感性
県立	県立	鶴丸高等学校	一年	田上 愛	「終末」から見えるもの
県立	県立	鶴丸高等学校	一年	馬場大晟	本からあたえられた物
沖縄県	県立	開邦高等学校	二年	永田昌吾	それを言葉にするということ
県立	県立	向陽高等学校	三年	玉木日菜	音楽と向き合う
県立	県立	向陽高等学校	二年	津波さくら	森光子さんと出会つて
那覇国際高等学校	県立	向陽高等学校	二年	諸見里まこ	旅をする。
	県立	那覇国際高等学校	一年	徳元聖巴	『あと少し、もう少し』の先に見えたもの

中央入賞者8名の受賞作品、および優良賞受賞者・入選者の氏名・学校名など  
は、「一ツ橋文芸教育振興会」のホームページに掲載されます。(2月中旬予定)

<http://www.hitotsubashi-bks.jp>

# 公益財団法人 一ツ橋文芸教育振興会

株式会社集英社が創業50周年を迎えた1976年、青少年の教育に熱心であった創業者、故相賀武夫氏の遺徳をしのび、これを顕彰するために、財団法人一ツ橋文芸教育振興会を文部省（現・文部科学省）の許可を受け、設立いたしました。そして2013年4月1日、内閣府より認定され、公益財団法人へ移行いたしました。

株式会社集英社は、創業以来、文芸出版活動に力を入れ、青少年文化の普及向上に努めてまいりましたが、当財団は特に青少年期における人間形成の重要性にかんがみ、主な事業対象を高校および高校生にしほり、学校教育の助成、青少年文化の向上発展に寄与すべく、「全国高校生読書体験記コンクール」や「高校生のための文化講演会」等を実施しております。

当財団は、株式会社集英社、株式会社小学館、株式会社白泉社、株式会社ホーム社、集英社ビジネス株式会社、集英社サービス株式会社、株式会社集英社クリエイティブ、株式会社一ツ橋企画の援助により事業を運営しております。

設立の趣意にご賛同いただき、当財団の事業に対し、よろしくご協力賜りますよう、お願い申しあげます。

公益財団法人 一ツ橋文芸教育振興会 (2019年12月現在)		
理事長	堀内丸惠	集英社代表取締役社長
理事	河野光代	作家（角田光代）
同	國分正明	前 教職員生涯福祉財団会長
同	辻 一朗	歌人（穂村 弘）
同	沼野充義	東京大学教授
同	東田英樹	集英社顧問
同	菱村幸彦	元 国立教育研究所所長
同	村上 博	作家（辻原 登）
常務理事	村田登志江	

## 公益財団法人 一ツ橋文芸教育振興会

〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋 2-5-10 集英社ビル  
TEL:03-3230-6069 FAX:03-5211-2663  
Eメール :hbk@hitotsubashi-bks.jp  
ホームページ :http://www.hitotsubashi-bks.jp

### 助成申請についてのお願い

国語教育研究会・高文連活動等に関する助成は、主催者からの申請によって行います。上記へご相談ください。

## 沿革と事業内容

1976.5	● 文部省より財団法人の許可を受け設立。
1976	● 「高校生のための文化講演会」事業を集英社より引き継ぐ。 高等学校へ作家・学者・文化人等を派遣。講演時間は1時間。 年間約80校で実施。 開催時、全校生徒に小冊子『読書への招待』を配布、学校図書館へは図書を寄贈いたします。
1977	● 高校生に対する「奨学金の給付」を開始。 (2006年より中断)
1981	● 「全国高校生読書体験記コンクール」を開始。毎年6月に学校へ案内、表彰式は翌年1月下旬に行います。
1984	● 高校生実態調査への協力を開始。 高校生の生活態度・意識等を海外の高校生と比較した「実態調査報告」を全国の高校に配布、またマスコミ機関にも提供。(2013年で当財団の助成は終了。なお、この事業は独立行政法人国立青少年教育振興機構の主導となり、継続しています)。 ● 災害罹災高校に図書贈呈等の事業開始。
1985	● 高校国語教育研究活動に助成を開始。 全国大会をはじめ、県単位の研究会に対し、講演会講師派遣などの助成を行っております。
1987	● 高文連の活動に助成を開始。 「全国高校生文芸コンクール」をはじめ、県単位の文芸コンクール、図書委員研修会等、講演会の講師派遣や賞品の提供などの助成を行っております。
1995	● コバルトノベル大賞、ロマン大賞の後援。 (2013年より「ノベル大賞」を共催)
2007	● 「書き書き甲子園」に助成を開始。
2013.4	● 内閣府より認定を受け、公益財団法人へ移行。
2019	● 第39回「全国高校生読書体験記コンクール」応募総数449校、92,591編。「高校生のための文化講演会」が54周年、開催校のべ4,132校、聴講生徒数約354万人。